

呼吸器疾患

科目責任者 仁 保 誠 治

学年 6 学年

I. 前 文

医学に限らずすべての自然科学に通じることであるが、どんな複雑に見える現象でも、その根源には普遍の原理が存在し、共通するメカニズムが働いている。それらの原理・メカニズムを把握して、改めて全体を眺めてみると意外と単純に見えてくることが多い。呼吸系は循環系と異なり閉鎖回路ではなく、外界と接した開放系でしかも循環系と接する。したがって、その構造、生理機能は極めて複雑であり、それらの異常として起こってくる疾患は多彩で、多臓器と関連して起こるものが少なくない。また、呼吸器の究極的な機能が酸素の摂取であるため、その重大な異常は生命自体に影響を及ぼし、治療には緊急を要する。学習者は、このような呼吸系の特徴をよく理解し、基本的なことについては述べることができるようにならなければならない。ここでは、呼吸器疾患の基礎的事項から各論までの知識を理解しやすいように整理した形で講義し、実際の臨床の場で、即、応用できるように講義する。

試験は講義で解説した内容をよく理解していれば解答できる問題を出題する。また、正解を公表するとともに、問題の適切性に関しての意見や設問に関する質問を受け付ける。

II. 担当教員

内科学（呼吸器・アレルギー）	仁 保 誠 治
内科学（呼吸器・アレルギー）	武 政 聡 浩
内科学（呼吸器・アレルギー）	中 村 祐 介
呼吸器外科学	千 田 雅 之
呼吸器外科学	前 田 寿美子
呼吸器外科学	中 島 崇 裕
日光医療センター 呼吸器内科	知 花 和 行

III. 学修の到達目標

- 1) 種々の呼吸器疾患の概念、発症機序、病態を理解する。
- 2) 呼吸器疾患の症候や理学所見から鑑別診断に必要な検査をあげられる。
- 3) 治療法を提示し、適切なものを選択できる。
- 4) 重症度や予後を理解し、説明できる。

IV. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

事前学習（20分）

- 1) 肺癌の組織分類と病期分類を理解し、病期別の治療法と予後を概説できるようにしておく。
- 2) 特発性間質性肺炎の分類と組織所見を言えるようにしておく。
- 3) 喘息とCOPDの薬物療法について概説できるようにしておく。

事後学習（30分）

代表的呼吸器疾患の臨床所見、検査所見、診断法、鑑別診断、治療法、予後などをなにも見なくても明快に説明できるようにする。

V. 授業計画及び方法 *（ ）内はアクティブラーニングの番号と種類

- （1：反転授業の要素を含む授業（知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。）
2：ディスカッション、ディベート 3：グループワーク 4：実習、フィールドワーク 5：プレゼンテーション

6：その他)

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
1	7	9	水	5	のう胞性肺疾患	呼吸器外科学 前 田 寿美子	1
2		9	水	6	免疫学的呼吸器疾患	日光 呼吸器内科 知 花 和 行	1
3		10	木	1	呼吸器感染症	内科学 (呼吸器・アレルギー) 中 村 祐 介	1
4		10	木	2	縦隔疾患	呼吸器外科学 中 島 崇 裕	1
5		10	木	3	肺癌	呼吸器外科学 千 田 雅 之	1
6		10	木	5	呼吸器悪性腫瘍 (内科的)	内科学 (呼吸器・アレルギー) 仁 保 誠 治	1
7		11	金	7	閉塞性肺疾患	内科学 (呼吸器・アレルギー) 武 政 聡 浩	1

Ⅵ. 評価基準 (成績評価の方法・基準)

各コマを網羅するように五者選択問題を作成し、原則として60%以上を正答したものを合格とする。

受験資格として、講義回数のうち2/3以上の出席を要する。

Ⅶ. 医師国家試験出題基準 (令和6年版) における区分

必修：7-D, 12-E

総論：Ⅵ 4-B～G, I

各論：Ⅳ 1～7

Ⅷ. 課題 (試験やレポート等) に対するフィードバックの方法

試験の結果を講評・解説します。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料、情報通信技術〈ICT〉などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	